

## 編集室より

◇台風 23 号が四国から兵庫県を通り抜け、風と雨の土産を岡山県下にももたらして農林、土木関係に 10 億円を上回る被害を与えていった。今年は年始めから暖冬異変に続き、異常低温の春、出足がくじかれた夏もようやく立直ったと思ったら 2 度目の台風に見舞われて秋は早々とやってきた。消費生活者にとっては住みよい天候かもしれないが、農業生産者には頭痛はちまきといった収穫の秋である。台風の被害を被むられた地方の皆さんには心からのお見舞を申しあげる。台風も 24 号以降まだまだ襲来しそうな気配であり、天災は人災に通ず、その対策に万全を期したいものである。

◇天候の方もさることながら、経済天気図も不況風はまだ尾をひいて秋から年末にかけての乗切り策に腐心しているようである。経済界の不況のあおりをうけて農業界も今年の前半は全くの混迷を続けた。経済界が好況になったときの農業界への波及はおくれるが、不況になり始めると早々に影響をうけるとは農業も割の合わない産業である。農民は生かさず殺ろさず政策が今もなお続いているようにみうけられる戦後 21 年目、池田内閣の高度成長政策のあとをうけた佐藤内閣は参院選選の洗礼をうけ、やがて予想されている衆院解散を通して、金融引締め政策、公債の発行等による経済界の立直し、佐藤体制の確立に着々の準備を進めているようである。今打つ手、これから樹立する対策がどのように効を奏してくるかはお手並拝見というところであるが、その効能が現れ始めるのは少くとも 1 年先のこと、待ち遠しいことである。

◇しかし、相も変わらず大企業が倒産し始めると「スワッカマクラ」とおっとり刀であわてるが、農家の 1 戸や 2 戸つぶれることはみてもぬ振りをするような政策の遂行をやられたのでは農業は救われない。農業政策もこの数年、農業基本法に基づく、農業構造改善事業を綿のみ旗に押しまくってきたが、末端でのうけはあまりかんばんしかなかった。ところによっては農業振興をはばんだ結果すら生んでいる。これに対して農林省も頭をいためているが、依然綿のみ旗を降す気持はないようである。農業構造を改善する主意は正論であるが、その方法には反省をする必要はあるのではなからうか。こうした世論を反映して農業構造改善事業の施策内容の手直しを余儀なくされるであろう。今、来年度予算の立案中ときくが、どのような内容を打出してくるか、銀座農政にはもうあきあきした。農業者の実態に即した効果のある政策を有効に且つ迅速に実行してもらいたいと願うのがいつわらざる農業者の声であろう。

◇今年後半の畜産物市況はやや持直す気配がみえ始め、前半でいためつけられた農家も明るさをとり戻してきたように見受けられる。県畜産会が行っている畜産コンサルタント事業の診断調査に出かけてみてもそのことは身近かに感じられた。そして農家がこの事業に対する関心や利用する態度も熱がこもってきている。こうしたことを背景に今年度の畜産コンサルタント事業はスタートし人気も上々であることは喜ばしい。これらを通して感じられることは農家自身が過剰投資を警戒し、堅実経営の確立に力をそそぎ、経営の充実には簿記記帳の重要性を自覚してきていることである。本誌では編集内容を全面的に検討して、我々の仲間が実際に営んでいる事例を中心に紹介する皆さんの機関誌的方向に切り替えていきたいと思っている。内部事情で本号の発行がおくれたことをお詫びすると共に、今後に期待されることを望む。